

為廣会長 少年期～2023年

双葉運輸ものがたり

双葉運輸 50th

昭和43年、退職金を頭金にして1台のトラックを購入。寝食を忘れて荷物を運んで東へ、西へ。お客様がお客様を呼び、繁盛した。その分、家族には寂しい思いをさせた。



高校卒業後、一般企業に就職し、周りの信頼を得て、すぐに所長職に就く。お客様と仲良くなり、結婚相手まで紹介してもらう。脱サラし独立したのも、お客様の助言からだった。

為廣少年はガキ大将だった。不義があると、正論をはいて宣戦布告。大人相手でも物怖じせずに立ち向かっていった。「不義を許さない」は、両親の教育の影響が大きかった。



県総体のバレーボール大会で猫田・森山選手（共にオリンピック代表）をよする崇徳高校に惜敗し準優勝。その悔しさが後に、逆境にめげない人格形成につながる。



昭和48年、第一次オイルショックで逆境の中、双葉運輸が誕生。社名の由来は、広島市と故郷の東広島市で必ず芽(双葉)を出すという強い決意からである。



トラックは手形で買えるが、修理は現金が必要。業者には何度も泣かされ、ケンカもした。「できない理由を探すより、できる方法を探せ」と、自らが先頭に立って金策に走った。

昭和52年、引越専門協同組合に加盟。当時は専門業者がおらず、面白いように仕事が取れた。

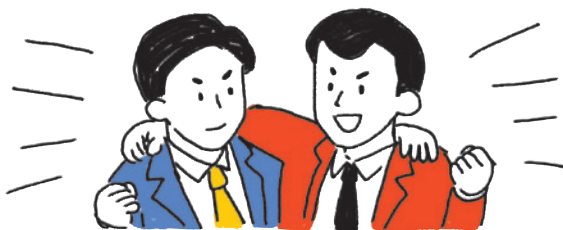


会社が大きくなるにつれ、人手不足はさらに深刻化。ロゴを作ってトラックを走らせたなら...と考えた。提案の中で輝いていたのが現在のロゴ。双葉運輸のトラックに乗りたい若者が殺到した。



昭和58年に中国道が全線開通。仕事は増えるが乗務員が不足。暴走族上がりの乗務員が一生懸命に働く姿を見て、ならばと、週末の夜に度々スカウトに出かけた。組織で更生を共に進める活動が評価され、後に為廣会長は更生保護協会の理事に就任する。

第二次オイルショックの最中の昭和55年、同業他社から呉正男社長をスカウトし、大竹双葉運輸(株)を設立。双葉運輸グループが誕生した。同時期に、故郷の東広島市に念願の西条営業所を開設した。

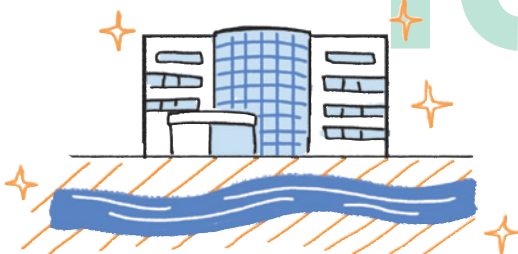


乗務員からの不満にも応えた。手積み手降ろしの有無などで、従業員のモチベーションが左右されるため、歩合給を導入。さらに従業員に感謝の心を持って接することで、絆が強くなる。

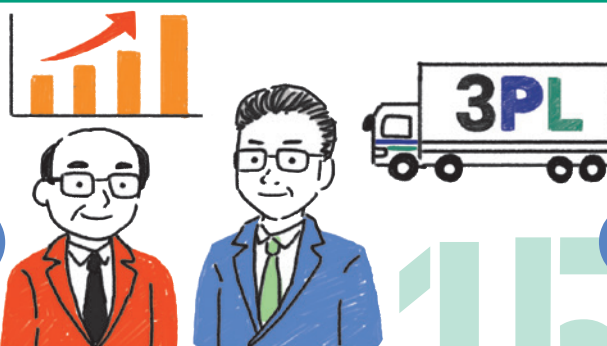


個性的な仲間が増えた。親睦会などを開催し従業員と共に心から楽しんだ。従業員の性格まで把握できた時代。今は全従業員のことが把握できない。少し寂しい思いだ。

平成9年、本社を広島市西区に移転。時には運も必要と風水の「地理五訣」を基準に、地下には豊富な水脈を蓄えた現在の場所を選んだ。澄んだ水は財運の象徴だ。



50周年は、単なる通過点。グループ17社合計車両1,215台、従業員数2,458人。今後は、中四国、九州エリアで自社が持つ潜在的輸送力を活用し、更なる飛躍を誓う。



3PLが世に広まり始めた頃、他社に先駆け物流センターを次々と完成させ、包括して物流を担う3PLを推進。業績アップにつながる。

本社は移転したが、すぐに従業員と車両も増え、駐車場が足りない状況になった。会長自らが陣頭指揮を執り、敷地内の山を削り、道路を切り開き、駐車場を作り上げた。

